

# 保育学生による地域子育て支援の取り組み

## —2012年度活動報告—

**A Community Parenting Support Program by Students in Early Childcare  
Practical Training School: A Report of the Activity 2012**

松 本 希 ・ 柴 川 敏 之  
澤 津 まり子 ・ 鎌 田 雅 史  
田 中 誠 ・ 秋 山 真理子  
Z. 山田章子 ・ 笹 倉 千佳弘  
山 根 薫 子

# 保育学生による地域子育て支援の取り組み

## —2012年度活動報告—

A Community Parenting Support Program by Students in Early Childcare  
Practical Training School: A Report of the Activity 2012

幼児教育学科

松 本 希  
柴 川 敏 之  
澤 津 まり子  
鎌 田 雅 史  
田 中 誠  
秋 山 真理子  
Z. 山田章子  
笹 倉 千佳弘  
山 根 薫 子

### はじめに

本学幼児教育学科では、子育て支援を目的とした学生ボランティアグループG B A (Girls and Boys Be Ambitious の略、以降G B Aと記す。)を結成し2012年度で7年目を迎えた。G B Aの主な活動は「就実やんちゃキッズ」の開催で、過去6年間の取り組みについては既に報告済みである<sup>1) 2) 3) 4) 5) 6)</sup>。

昨年度の課題として、1) 学生間のグループ編成、2) プログラムの改善、3) 増加する参加者への対応と安全確保、4) インターネットを介した本活動の情報発信の4点をあげた。

もう少し詳しく説明すると、1) は柔軟な発想による、学生間のグループ編成人数のばらつきへの解消、2) は子どもだけでなく全ての参加者が一緒に参加できるようなプログラムの構築と原作の改編や著作権への対応、3) は参加者の増加傾向に伴う交流広場の動的な遊びの場における安全確保、4) はインターネットを介した「やんちゃキッズ」や子育て支援の情報発信や参加者の情報交換の場の提供、ということである。

本報告は、上記のような課題解決を念頭においてすすめた、2012年度の地域子育て支援の取り組みについて、経過及び結果をまとめたものである。

## 1 活動内容

### 1) 「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」

「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」の実施は今年で5年目を迎えた。年間の活動回数は昨年と同様の9回である。例年通り「やんちゃキッズ」は、前半はパネルシアター・リズム体操・オペレッタ・手遊びを行い、後半は様々な遊びを行うことのできる交流広場で構成している。公演内容及び参加人数は、表1に示す。

表1 就実やんちゃキッズ活動内容

日時	公演演目	参加人数	学生数
第1回 4月21日	パネルシアター「いぬのおまわりさん」 リズム体操「エビカニクス」 オペレッタ「大きなかぶ」、幕間に手遊び、交流広場	大人 165人 子ども 187人	64人
第2回 5月26日	パネルシアター「ドコノコノキノコ」 リズム体操「ドンスカバンバンおうえんだん」*健康・保健関連 オペレッタ「さるかにがっせん」、幕間に手遊び、交流広場	大人 181人 子ども 192人	82人
第3回 6月23日	パネルシアター「あわあわ手あらいのうた」*健康・保健関連 リズム体操「生きてる生きてく」 オペレッタ「むしばなんてやっつけろ」*健康・保健関連 幕間に手遊び、交流広場	大人 225人 子ども 231人	80人
第4回 9月15日	パネルシアター「にんじん だいこん ごぼう」 リズム体操「もったいないばあさん音頭」*健康・保健関連 オペレッタ「ももたろう」、幕間に手遊び、交流広場	大人 238人 子ども 261人	39人
第5回 10月27日	パネルシアター「いぬのおまわりさん」 リズム体操「サンサンたいそう」*健康・保健関連 オペレッタ「おおかみと7匹の子やぎ」、幕間に手遊び、交流広場	大人 127人 子ども 145人	45人
第6回 11月17日	パネルシアター「コンコンクシヤンのうた」*健康・保健関連 リズム体操「ほよよん行進曲」 オペレッタ「かなちゃんは菌、大丈夫？ -菌磨き習慣を身につけましょう-」*健康・保健関連 幕間に手遊び、交流広場	大人 112人 子ども 130人	38人
第7回 12月15日	パネルシアター「カレーライス」 リズム体操「ハッピージャムジャム」*健康・保健関連 オペレッタ「サンタさんのいねむり」、幕間に手遊び、交流広場	大人 86人 子ども 102人	46人
第8回 1月26日	パネルシアター リズム体操 オペレッタ「かなちゃんは菌、大丈夫？ -菌磨き習慣を身につけましょう-」*健康・保健関連 幕間に手遊び、交流広場	大人 人 子ども 人 未定	人 未定
第9回 2月16日	パネルシアター リズム体操 オペレッタ、幕間に手遊び、交流広場	大人 人 子ども 人 未定	人 未定

\*第4回の学生数は、2年生が実習で不在のため1年生のみの参加となっている。

昨年度に引き続き、G B Aの活動は平成24年度岡山県備前県民局協働事業に採択された。今年度の申請課題は「保育学生が行う支援活動を通して子どもから派生する家族みんなの健

康づくりの推進」である。そこで申請課題を達成するために「やんちゃキッズ」で実施するパネルシアター、リズム体操、オペレッタ、交流広場の中に「子どもと一緒に健康づくり」をテーマに「健康・保健」に関する内容を取り入れ実施している。例えば、幼少期に育みたい基本的な生活習慣に食事、睡眠、着脱衣、排泄、清潔がある。これらは、生涯を通して健康を維持増進する上で必要な習慣である。そこで、その大切さを視覚的及び体感できる指導教材的なリズム体操やオペレッタを実施している(図1)。リズム体操では、子どもだけでなく保護者やシニア世代にも一緒に体を動かせる運動内容にした。交流広場では、身長・体重計を準備し、希望者には測定を行い、自分の体のチェックができるコーナーを設けた(図2)。



図1 健康・保健関連オペレッタ



図2 身長・体重コーナー

また、子どもの野菜嫌いを克服するレシピと親子体操を掲載したリーフレットを、1歳半～2歳向けと3歳以上向けの2種類作成し、受付で参加者に配布した(図3-6)。このリーフ



図3 1歳半～2歳向けリーフレット(運動面)



図4 1歳半～2歳向けリーフレット(食事面)



図5 3歳以上向けリーフレット(運動面)



図6 3歳以上向けリーフレット(食事面)

レットの食事レシピは、本学科の2年生が「教職実践基礎演習」の授業の一環として「やんちゃキッズ」に参加している子どもに嫌いな野菜を聞き取り調査し、上位にあがった野菜の嫌いな理由を考察し、その内容を元に外部機関の管理栄養士に「やんちゃキッズ」オリジナルの食事レシピを考案してもらった。親子体操は、幼児期に育みたい運動機能を親子で遊びながら高めることができるよう、写真も用いてわかりやすく説明した。このように今年度の「やんちゃキッズ」に参加することで家庭での健康活動を振り返り、増進させるような内容を提供しよう努めている。

今年度、交流広場の活動の充実も図った。前述の身長・体重コーナーの新設だけでなく、既存のいくつかのコーナーも発展させた。例えば新たに、ダンボールハウスコーナーとして、図画工作Ⅱの授業で学生が作成したダンボールハウスを設置した(図7)。新聞シャワーコーナー



図7 ダンボールハウス

では、囲いをダンボールで作成し、学生が外側と内側に絵を描き、新聞片の飛散を防ぐと同時に、海の中を表現して、子どもに親近感や臨場感を感じるよう演出した。赤ちゃんコーナーには、学生が作成した手作りおもちゃを増やした。伝承遊びのこまコーナーでは、地域のシニアの方が学生や子どもと一緒に遊ぶ姿が見られ、昨年度からの世代間交流の取り組みが定着しはじめている。こうした環境を整えていく中で、学生の子どもへの関わり方も積極的になり、遊び方の工夫が見られた。

今年度になり、参加者は増加傾向にある。これは、市内保育園・幼稚園へのポスターの配布及びホームページの充実等によるものと考えられる。特に6月・9月は約500人の参加があり、今後更なる安全対策が必要である。現在、危険があると予測される箇所は、参加者が出入りする体育館前の横断歩道付近と子どもが自由に遊び、移動することのできる交流広場である。その安全対策として、参加者が来場する時間帯に警備員を横断歩道に配置した。交流広場では、会場構成を工夫した。ダンボールハウスを体育館の中心に一列に並べることで、大きな仕切りを作り、一方を「静かなおもちゃあそび」、もう一方を「動きのある運動あそび」に明確に分けた。そして、各コーナーを、活動内容の特質を考慮して配置した。これらを示した会場図を、保護者に当日配布するプログラムの中に入れて、注意を促している(図8)。今後も参加者が増加する場合には、体育館1階の多目的ホールを交流広場の第2会場として活用し、参加者が一カ所に集中しないようにすることを検討している。

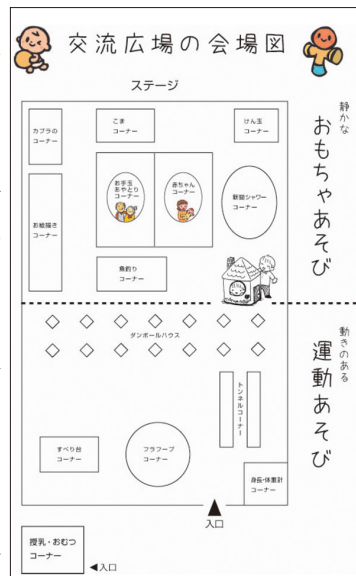


図8 会場図

2) 「出前就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」

「出前就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」(以降、「出前」と略)は、学内で実施する「やんちゃキッズ」に参加しにくい地域の親子を対象に、子育て支援の輪を拡大するとともに、学生がその地域の子育ての状況を理解することを主な目的として実施している。本活動は、GBA発足以来の恒例行事となっており、夏休みや冬休みの長期休暇を利用して行っている。本学幼児教育学科は、2年生が7月から長期学外実習のため、夏休み以降に行われる「出前」は、1年生を主体とした公演である。

今年度の「出前」は、4か所で実施した。開催場所は岡山備前県民局管内の赤磐市、吉備中央町、玉野市、岡山市であった。公演の具体的内容及び参加者人数は、表2に示した。

表2 出前就実やんちゃキッズ活動内容

日程	会場	公演演目	参加人数	学生数
9月20日 (木)	赤磐市 桜が丘いきいき 交流センター		大人 73人 子ども 79人	44人
9月21日 (金)	吉備中央町 かよう総合スポーツ 公園内体育館	パネルシアター「にんじん だいこん ごぼう」 リズム体操「もったいないばあさん音頭」 *健康・保健関連 オペレッタ「ももたろう」、幕間に手遊び、 交流広場	一般大人 13人 一般こども 13人 園児 133人 保育士 22人 愛育委員 22人	41人
9月27日 (木)	玉野市 総合保健福祉(す こやか)センター		大人 73人 子ども 79人	39人
12月8日 (土)	岡山市 JDS岡山支部 クリスマス会	リズム体操「ハッピージャムジャム」 *健康・保健関連 オペレッタ「サンタさんのいねむり」、 幕間に手遊び、交流広場	大人 45人 子ども 56人	46人

公演の基本構成は、学内で行う「やんちゃキッズ」と概ね同様であるが、各地域の担当者の要望に合わせて実施した。開催場所の決定は、昨年に引き続き赤磐市を選び、その他は子育て世帯に広く我々の活動を知ってもらうために、過去2年以上実施歴の無い吉備中央町と玉野市を選んだ。それぞれ、備前県民局協働事業担当課に同行してもらい、地域の担当者と詳細を決定した。赤磐市は、昨年度と同様に「NPO法人元気交流クラブたけのこの家」に実施協力の依頼をし、同団体の親子クラブの参加者及び、世代間交流を目的として近隣の老人クラブへチラシの配布をお願いした。また、備前県民局から赤磐市の担当課及び同市内のNPO法人にチラシの配布をお願いした。吉備中央町は、町の保健課を通じて町内の保育園に呼びかけて頂き、園の行事として町内の公立保育園5園及び私立幼稚園1園の3歳以上の園児が参加した。加えて、町が実施する子育てサロンに参加している未就園児の親子にも参加の呼びかけをした。吉備中央町の参加者の主体は園児であるため、子どもの安全確保及び世代間交流を目的として、町内各地区の愛育委員の方々にも参加して頂いた。玉野市は、子育て支援課を通して、市の子育て支援センターイベントとして、支援センターが実施する「手

作りおやつ講座」と合同で行った。子育て支援課及び子育て支援センターから対象者へチラシを配布した。岡山市での活動は、JDS（財団法人日本ダウン症協会）岡山支部のクリスマス会への参加であった。この活動は今年で4回目であり、ダウン症児とその保護者と関わることによって、学生がダウン症についての理解を深めることも目的の一つとして実施している。

今年度の「出前」の特徴的な点は、各地区によって参加した子どもの年齢層に違いがあったことである。通常、「出前」は平日の昼間に実施するため、参加する子どもは未就園児が主であるが、吉備中央町では園の行事としても実施したため3歳以上の子どもがほとんどであった。各地域で実施したことにより、学生は発達に応じた特徴的な子どもの反応を感じることができたと考える。普段と異なる環境の中で、回数を重ねるごとに臨機応変に対応することができるようになり、毎回の課題と次回への反省を考えることができたようである。このような学外の環境の中で実施し、精度を高めながら成功を収めたことで達成感を感じ、自信につながったと考える。

## 2 アンケートの方法及び結果

「やんちゃキッズ」では、保護者と学生に対し、アンケート調査を行っている。

### 1) 保護者へのアンケートの方法

受付でアンケート用紙を配布し、「やんちゃキッズ」終了時に回収した。アンケートでは、保護者に対し、①子どもの年齢、②子どもとの続柄、③やんちゃキッズのプログラムの内容に関する意見、④今後の参加意思について尋ねた。

### 2) 保護者へのアンケート結果

以下の結果は、「やんちゃキッズ（4/21、5/26、9/15）」及び、「出前（赤磐市、吉備中央町、玉野市）」で得られたデータに基づくものである。アンケートの全体の回答数は、595件であった。

#### i. アンケートの記入者と子どもの関係

アンケート記入者と子どもの関係について、表3に示す。記入者（引率者）の多くは、母親であり（約85.5%）、次いで父親（約6.7%）、父母（約4.4%）の参加が多かった。

#### ii. 子どもの年齢について

1世帯辺りの子どもの参加人数は、全体の60.9%が1人、34.7%が2人、4.4%が3人以上であった。

表3 アンケートの記入者

	人数	割合 (%)
母	509	85.5
父	40	6.7
父母	26	4.4
祖母	10	1.7
母祖母	3	.5
母祖父	1	.2
その他	3	.5
欠損値	3	.5
合計	595	100.0

子どもの総数は851人となっており、年齢の分布は、表4の通りである。全体として、最も多いのは1～3歳未満の子どもだった。

表4 参加した子どもの年齢

年 齢	人数	割合 (%)
1歳未満	101	11.9
1歳以上～3歳未満	439	51.6
3歳以上	311	36.5
合計	851	100

iii. プログラムについて

①全体の時間について

やんちゃキッズは、90分間のプログラムで開催している。参加者のプログラムの長さについての印象を図9に示す。参加者の83.0%がちょうど良いと答えており、プログラムの長さは適切であることが示された。

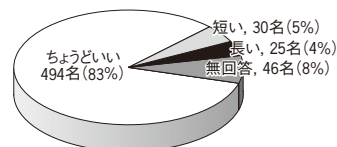


図9 プログラムの長さ

②一番良かったと思うプログラム

保護者と子どもが選んだ最も良かったプログラムを表5に示す。交流広場を一番良かったと答える保護者（32.3%）と子ども（36.9%）が多かった。昨年のアンケートで課題として示した子どもの無回答を減らすために、今年度は、設問を見直し、記述式の項目を選択式のフォーマットに変更する修正を加えた。この修

表5 一番良かったプログラム

	保護者		子ども	
	度数	パーセント	度数	パーセント
交流広場	345	32.3	305	36.9
リズム体操	239	22.4	124	15.0
オペレッタ	188	17.6	124	15.0
手遊び	150	14.0	79	9.6
パネルシアター	87	8.1	37	4.5
その他	2	0.2	3	0.4
無回答	57	5.3	155	18.7
合計	1068	100.0	827	100.0

正によって、今年度の無回答は18.7%まで下げることができた（2011年度、34%）。質問紙調査による回答を得るには、発達的な困難さも伴うが、できるだけ多くの意見を取り入れるために今後もアンケートのフォーマットの改善に取り組んでいきたい。

iv. 今後の「やんちゃキッズ」への参加意思について

図10に示す通り、保護者に対して「今回のような企画があれば、また参加したいと思いますか?」と尋ねた結果、ほとんどの参加者が、参加したいと「思う」と回答した。地域の子育てを支援する継続した取り組みとして、本活動がますます期待されているものと思われる。

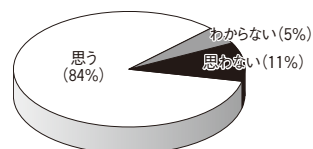


図10 今後の参加意思

3) 学生の振り返りのためのアンケートの方法

本アンケート調査は、学生自身が活動を振り返り、さらに問題点を抽出し、次回以降の



「やんちゃキッズ」に活かすきっかけとすることを目的にしている。「やんちゃキッズ」終了後の振り返りの時間に、学生にアンケート用紙を配布し回収した。質問紙は、①公演について振り返り（11項目）、②交流広場（子どもとのふれあい）に関する振り返り（10項目）、③全体に関する満足度の振り返り（2項目）の23の振り返り項目から構成されている。各項目について「あてはまる（5点）」「少しあてはまる（4点）」「どちらでもない（3点）」「ややあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」の5件法にて回答を求めている。加えて、公演と交流広場での活動それぞれに関し、学生がどのような課題を意識するようになったかについて自由記述による回答を求めた。7月のやんちゃキッズまでは、1年生と2年生の混合で実施し、9月のやんちゃキッズからは2年生の長期学外実習のため、1年生のみで実施した。各回でアンケートに回答した学生数は、4月（64名）、5月（82名）、9月（25名）、出前やんちゃキッズ（36名）であった。

#### 4) 学生へのアンケートの結果について

##### i. 調査項目の因子分析と全体的満足度との関連

質問項目の集約と今後の改善を目的に、公演に関する10項目と、子どもとのふれあいに関する9項目について、主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行った。その結果、固有値の絶対値1を基準とした場合も、固有値の変化量及び因子の項目の解釈可能性から判断した場合も5因子による解釈が妥当であった。回転前の累積説明率は、65.30%であった。全ての項目ごとの記述統計の値と因子分析結果を表6に示す。

表6 測定項目の因子分析結果と記述統計量

	公演	子ども理解	積極性	交流	課題	項目平均	標準偏差	N
p1 事前準備・練習がよくなった	.711					3.91	1.09	193
p2 保育に関する技術が身についた	.677					4.11	.85	193
p3 人前で演技することが上手になった	.669					3.43	1.24	193
p6 みんなと協力することができた	.643					4.50	.69	193
p7 臨機応変に行動することができた	.622					4.02	.79	193
p8 自分自身で創意工夫した	.613					3.59	.98	193
p9 自分の役割がきちんと果たせた	.563					4.25	.93	193
k6 他人の立場や気持ちをくみ取れるようになった		.857				3.89	.76	193
k7 子どもについての理解が深まった		.784				4.15	.70	193
k5 自分に自信が持てるようになった		.695				3.81	.84	193
k8 子育て支援への理解が深まった		.460				4.22	.77	193
k1 子どもと積極的に交流できた			.697			4.47	.73	193
k4 自分も楽しく参加できた			.665			4.67	.62	193
p5 積極的に活動できた			.600			4.37	.69	193
p4 意識して笑顔ができた			.453			4.57	.61	193
k3 遊びのレパートリーが増えた				.590		3.52	.97	193
k2 保護者・高齢者と積極的に交流できた				.549		3.67	1.05	193
k9 (公演について) 新たな課題が見つかった					.805	4.26	.88	193
p10 (交流ひろばで) 新たな課題が見つかった					.401	4.23	.92	193
主因子法 プロマックス回転による因子分析の因子間相関	公演	子ども理解	積極性	交流	課題			
	公演	(.84)	.51	.47	.14	.45		
	子ども理解		(.83)	.58	.15	.56		
	積極性			(.75)	.08	.50		
	交流				(.63)	.09		
	課題					(.58)		

第1因子は、公演の準備や実施に関する項目が負荷していることから「公演」因子と命名した。第2因子は、子どもとの交流のなかでの気づきや理解の深まりに関する項目が負荷していることから「子ども理解」因子と命名した。第3因子は、積極的・自発的な取り組みに関する項目が負荷していることから「積極性」因子と命名した。第4因子は、保護者との関わりや、気づきに関する項目が負荷していることから「交流」因子と命名した。最後に、第5因子は、新たな課題への気づきが負荷しており「課題」因子と命名した。各項目についてのクロンバックの $\alpha$ 係数は(.58-.84)であり、比較的係数が小さかった交流因子(.63)と課題因子(.58)については、将来的に質問項目を補充するなどの改善の余地が認められたが、全体的な信頼性は概ね妥当なものであった。因子ごとに求めた尺度得点および、学生の満足度に関する項目の記述統計量について表7に示す。1サンプルのt検定を用いて、“3：どちらでもない”という回答と比較したところ全ての項目について、学生は有意義であると回答をしている傾向が示された。全ての尺度得点について、学生の全体的満足度と正の相関が認められた。続いて「やんちゃキッズ」に対する全体的満足度を基準変数として、公演、子ども理解、積極性、交流、課題の尺度得点を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、重相関係数は $r^2=.29$ であり、公演( $\beta=.43, p<.001$ )および子ども理解( $\beta=.16, p<.05$ )の係数が有意な値を示した。以上の結果から、特に公演準備運営に一生懸命に関わり、充実感や達成感を感じた学生は、活動全体についても肯定的に捉えていることが示された。

表7 尺度得点の記述統計量および1サンプルのt検定

	相関係数					平均値	標準偏差	N	“どちらでもない”を基準とした 1サンプルt検定
	満足度	公演	子ども理解	積極性	交流				
満足度	1	.50**				4.34	(.79)	200	t(199) = 23.86***
公演		1	.36**	.34**	.20**	3.96	(.68)	205	t(204) = 19.99***
子ども理解			1	.46**	.49**	4.01	(.62)	202	t(201) = 23.15***
積極性				1	.56**	4.51	(.51)	207	t(206) = 42.43***
交流					1	3.60	(.86)	202	t(201) = 9.85***
課題						4.25	(.75)	207	t(206) = 23.8***

\*\*、相関係数は1%水準で有意(両側)です。

## ii. 1年生の取り組みの経時的分析

2年生の長期学外実習のため、「やんちゃキッズ」は、9月からは1年生が主となって活動する。9月は、定例の「やんちゃキッズ」のほかに、「出前」も開催され、1年生は試行錯誤しながら急激な変化を見せる時期である。「やんちゃキッズ」及び、「出前」の開催ごとのアンケート項目の記述得点について図11に示す。

振り返りアンケートの満足度、公演、子ども理解、積極性、交流、課題に関する尺度得点を従属変数とし、測定時期を独立変数とした多変量分散分析を行い、各時期の平均値得点を比較した。その結果、多変量検定における Pillai のトレースは  $F(6, 113) = .99$  であり 5% 水準で有意な値を示したため、個別の従属変数に関する分散分析と多重比較を行った。その結果、満足感 ( $F(3,118) = 3.8, p<.05$ )、公演 ( $F(3,118) = 11.28, p<.001$ )、子ども理解 ( $F(3,118)$ )

= 2.68、 $p < .05$ )、課題 ( $F(3,118)$   
 = 4.10、 $p < .05$ ) の主効果が有意で  
 あった。次いで、*Tukey HSD* に  
 よる多重比較を行った (図11)。  
 4月・5月の2年生と一緒に活動  
 していた時期に比べ、初めて1年  
 生のみで行った「やんちゃキッズ」  
 は、満足度が有意に低下している。  
 しかしながら、「出前」の終了時  
 には、満足度が高まっていてい  
 る様子が認められた。課題の発見に

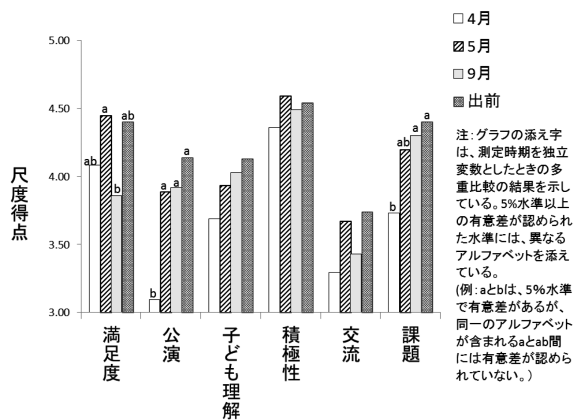


図11 1年生の取り組みの変化

関しては、4月当初に比べ9月と「出前」においては、有意に増加している。G B Aの活動を主体的に捉え、自ら課題を探し、より良くしていこうという意識と成長が伺える。

### iii. 自由記述式のアンケート

自由記述式のアンケートにおいて、多く書かれていた意見を以下に示す。「やんちゃキッズ」を学生が主体的に捉え、よりよい活動にしようと向上心をもって取り組んでいる姿が見て取れる。

#### ①事前の準備や練習に関する感想や課題についての気づき

- ・音響 (ハウリング) の改善について
- ・AグループとBグループと中四の連携について
- ・2年生不在に対する思いについて など

#### ②運営上の課題や改善案についての気づき

- ・運営上の安全への配慮について
- ・対策こどもがアンケートを書く時間が必要であるなど全体の進行について
- ・荷物の置き場などについて
- ・授乳室とおむつ室の改善について など

#### ③活動の中で、気づいた反省点や課題、うまくできたことへの振り返り

- ・伝承遊びのコマが自分でできなかった
- ・保護者と多く関わったなどの感想
- ・保護者がリズム体操に参加してくれて嬉しかったなど活動に関する感想 など

#### ④活動を通しての子どもや保護者との関わりへの気づき

- ・年齢ごとの反応の違いについて
- ・身長体重を測るとき子どもへの声かけについて
- ・保護者と接する時の注意について

## ⑤アンケートの抜粋

- ・身長・体重を測る際、怖がって泣く子がいたので楽しく行えるよう工夫が必要だと思った
- ・交流広場ではけん玉やお手玉を高齢者の方に教えていただいて積極的に参加できた
- ・コマ回しができなくて子どものお手本になれなかったところ、お父さんが教えてくださった
- ・保護者の方にも楽しんでもらえ、学んでもらえる場にしたい

アンケートから、学生は子どもだけでなく保護者への関わりも意識して活動していることが読み取れた。特に母親の参加が圧倒的に多い中、父親との関わりが印象的であったようである。また、学生自らが子育て世代と触れ合いながら、コミュニケーション力を磨き、主体的に活動している様子が認められた。「やんちゃキッズ」の一義的目的は、地域の子育て支援への貢献であるが、本活動を通して、学生に対してもよい成長の場であることが伺える。

## おわりに

以上、2012年度の活動を今年度の課題に従って、次のように考察及び総括をし、今後の課題を提示する。

### 1 今年度の課題の達成状況

#### 1) 学生間のグループ編成

昨年度までの準備や各公演に対する編成人数の偏りを危惧して、より効率的な運営・実施及び学生が責任を持って役割を実施することを目的に、明確な役割分担を行った。まず、1年生をAとBの2グループに分け、それぞれのグループ毎にリーダー、副リーダー、記録係、広報係を決定し、公演及び交流広場に関する係を15部門設定した。内容によっては、複数の係を受け持つ学生もいる。責任が明確化しているため、自分の受け持つ係をより良くしようとする努力が見られる。一方で、自分の係にしか意識が向かず、その他の係との連携や余裕のある係が自ら気づいてサポートを必要とする係を手伝うといった意識が希薄であった。学生が主体的に気づき助け合うことができるよう、各係は柔軟な関係性であることを示し、全員が同じGBAのグループの構成員であるという自覚と全員でより良い「やんちゃキッズ」を実施するという認識を持つよう、援助が必要であると考えた。

#### 2) プログラムの改善

昨年度のテーマは「世代間交流」であり、今年度も同様に子どもに異世代間との交流や伝承遊びの継承を推進するために、おじいちゃん・おばあちゃんや地域の方々にも来場して頂くよう促している。そのため、リズム体操は子どもだけでなく参加者全員が運動をするよう促したり、交流広場の身長・体重コーナーは大人も含めての測定を可能としているが、「やんちゃキッズ」の主体は子どもであるため、高齢者参加型のプログラムの構築は進展してい

ない状況である。アンケート調査から、父母ではなく祖父母が子どもを連れてやんちゃキッズに参加している割合は約2%であった。交流広場のコマコーナーにおいては、地域の高齢者が頻繁に参加して下さり、アンケートの自由記述の感想には、コマの回し方を習いたいという子どもが多いことがわかる。高齢者が単独で「やんちゃキッズ」に参加し難い側面もあるが、交流広場のような場で、自らが持っている遊びの技術を子どもに伝えて頂くような取り組みを今後も提供していきたいと考えている。

昨年度、課題として挙げた著作権及び死を扱うプログラムの扱い方については、今年度も取り組むことができなかった。引き続き、次年度の課題である。

### 3) 増加する参加者への対応と安全確保

今年度、10月開催までの参加者数を昨年と比較すると約170%増であった（総計：2011年度1、137名、2012年度1、952名）。昨年も増加傾向にあることを報告したが、今年度の参加者の急増は、我々の予想を遥かに超える結果であった。そこで、前述した通り、来場時間及び退場時間に合わせて、体育館前の横断道路に警備員を配置した。また従来加入していた保険の内容を見直し、保険対象のエリアを広げた。学生には、ミーティングの度に危険管理と安全対策の徹底を呼び掛けている。交流広場は、自由に遊べるため危険が予測される。今年度より、学生の係分担を行ったので、各コーナーに学生が偏りなくおり、安全対策の一助になっていると考える。幸い、現在までに大きな怪我及び事故は発生していない。しかしながら、今後の見通しは明らかでない。様々な自然災害や事故を想定して、共通認識のもと危機管理マニュアルの作成が必要である。

子どもを中心に考えた場合、参加者の増加によって、全ての子どもが伸び伸びと楽しく遊べていない可能性もある。会場の広さから、何名ぐらいの参加が最適であるのかを考え、参加者数によっては第2会場として多目的ホールを使用する等、臨機応変に対応する、もしくは、来場制限などの制約をかける等の対策も今後必要になると予測される。

参加者の増加と合わせて、父親の参加が増えた。アンケート結果から、子どもとの続柄が「父親のみ」及び「母親と父親」の者は11.1%（表3）であった。それに伴い、父親の参加者から、授乳室とおむつコーナーを分けてほしいとの意見が出た。父親がおむつ交換のコーナーを利用し易いように、仕切りによって分離した。今後もこのように、母親や父親だけに留まらず、様々な子育て世帯の視点で「やんちゃキッズ」における子育て支援の方法を考える必要がある。

### 4) インターネットを介した本活動の情報発信

本学のホームページのリニューアルに伴い、今年度より、ホームページのトップページに「やんちゃキッズ」のバナーを作成し、トップページから幼児教育学科のページを介すことなく、直接ページを閲覧できるようになった。毎回、やんちゃキッズ実施前に実施予定の公

演プログラムを掲載し、やんちゃキッズ実施後には報告の文章を載せている。お知らせ事項がある場合には、その都度、記事を掲載している。今年度の保護者アンケートの結果から、ホームページを見て参加したという親子は約7%であった。今後もホームページ上に細やかな情報発信をしながら、アンケート調査よりホームページの利用の動向を確認し、利用が増加傾向にある場合には、子育て支援に関する内容や手作りおもちゃの作り方等の発信にも取り組んでいきたい。

## 5) その他

昨年度の活動目標のうち、今年度に改善及び前進した内容について報告する。

(1) 倉庫内の整理整頓：スチール棚を購入して整備を行い、物品の保管場所を指定した。

(2) イメージカラーの定着：イメージカラーを黄緑色とし、昨年度作成したポスターや幟に加え、今年度はTシャツも黄緑色に一新した。新聞シャワーの外壁、授乳室・おむつコーナーの外壁なども、イメージカラーで統一し、一体感を演出した。

## 2 今後の課題

### 1) 増加する参加者への対応と安全確保

前述した通り、今年度は我々の予想を遥かに上回る参加者が来場した回が数回あった。幸い、大きな怪我や事故が起こってはいないが、今後の見通しは不明であるため、様々な場面を想定した危機管理マニュアルの作成が必要である。その他にも、参加者の増加に伴い、学生スタッフの不足、子ども一人辺りの遊ぶスペースの減少、遊ぶおもちゃの不足、保護者への配布物の不足、受付での待ち時間の増加、迷子の増加等の問題もある。保護者のアンケートを参考にしながら、学生や教員が柔軟に意見を出しつつ、一つずつ対応策を検討していきたい。

### 2) 学生間の協力体制

今年度より、学生の役割を明確にするため、係の分担を行った。それぞれが責任を持って自分の持ち場の準備及び運営をしている。しかしながら、学生へのアンケート調査から係によって仕事量の差があるため、不満に思っている者がいたり、自分達より大変な係を手伝うといったような関係性が希薄であると感じる。係の決定時に、自分の係とその他の係は柔軟な関係性であることを示し、グループとして、全員が「やんちゃキッズ」を通して、様々な経験ができるように配慮が必要であると考えている。

### 3) 著作権及び死を扱うプログラムの扱い方

「やんちゃキッズ」で実施するパネルシアター及びオペレッタは、歌を含めた公演となっている。原作が明確にある内容の場合、子どもが理解するために、どこまでの内容の変更が

許されるのであるか、我々は認識できていない。同様に、歌についても替え歌として許される範囲が明確でない。現在は、学生に事前にシナリオを提出させ、一般的に問題無いであろう範囲内であることを確認している。今後、安心して公演活動ができるように、専門家を招き、勉強会を開催したいと考えている。

オペレッタは童話を基に実施する機会が多いが、童話には「悪者をやっつけて殺す」というような内容が少なくない。今年度も同様な筋書きで「さるかに合戦」と「おおかみと七匹の子やぎ」のオペレッタを行った。子どもに「やっつけて殺す」をどのように見せるのか、実際の保育現場や外部組織が行っている公演などを参考にしながら、学生と話し合い、共通認識を持って今後の公演活動を行うようにしたいと考えている。

## 謝辞

2012年度の子育て支援ボランティアグループGBA及び「就実やんちゃキッズ」の活動は、平成24年度岡山県備前県民局協働事業補助金及び平成24年度就実大学・就実短期大学学術・文化・スポーツ奨励金を受け、その活動を充実させた。記して深謝致します。

## 引用文献

- 1) 村田恵子、澤津まり子、立石あつ子 (2006). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—備前地域子育てキャラバン事業報告—、就実論叢、36 (社会篇)、pp.135-152.
- 2) 澤津まり子、永田彰子、田中誠、立石あつ子 (2007). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2007年度活動報告—、就実論叢、37 (社会篇)、pp.81-98.
- 3) 澤津まり子、堤幸一、立石あつ子、伊藤真、笹倉千佳弘、田中誠、永田彰子、山根薫子、Z. 山田章子 (2008). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2008年度活動報告—、就実論叢、38 (社会篇)、pp.285-298.
- 4) 澤津まり子、伊藤真、堤幸一、立石あつ子、笹倉千佳弘、Z. 山田章子、田中誠、山根薫子 (2009). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2009年度活動報告—、就実論叢、39、pp.233-247.
- 5) 澤津まり子、立石あつ子、柴川敏之、秋山真理子、堤幸一、笹倉千佳弘、田中誠、山根薫子 (2010). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2010年度活動報告—、就実論叢、40、pp.163-172.
- 6) 澤津まり子、柴川敏之、松本希、鎌田雅史、Z. 山田章子、秋山真理子、笹倉千佳弘、田中誠、山根薫子 (2011). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2011年度活動報告—、就実論叢、40、pp.163-172.